1
いわゆる＜物体の全部分を通しての(全体にわたる)融合＞について考察しなければならない

通全融合(全体的融合)とは、二つの物体が他を押しのけ余りこと全く同一の場所に共存する混合の方式である。この時、両者の性質は変化せず、再び分離さうろ。この理論はアレクサンドロスによるとストア自然学の基礎となっている

いったい、ある液体が別の液体に混ぜ合わされた時、全体が全体に浸透されたことが可能であるか、双方がそれぞれ他方にゆきわたるのであっても、あるいは一方が他方にゆきわたるのであってもよいが

ストア派は、混合を以下の三つの場合に分けた。＜並列：パラテシス＞、＜化合：シュンキシス＞、＜融合：クラーシス＞である。デモクリトス、アナクサゴラスは全体融合の原理はパラテシスであるとした

なぜなら、とにかくこのことが起きるのであれば、どちらの住方であろうと、何のちがいもないからである

というのも、そもそも融合とは、混ぜ合わされた全体を等質のものとすることであり、それの各部分が、最小の部分すら、融け合っていると言われるものから成り立っているのではなければならぬとすれば、交互並列に、原因を伸ずる人たちは、融合させるというよりも、むしろ混合させているのだから、無視されてよい

さて、性質だけが融合するのであって、両物体の素材は交互に並列するのだとして、これらの素材の上へ両方からの性質を上乗せする人たち(＜ペリパトス派)は、次の理由をあげて全体的融合を拒否する点で説得的であるだろう

すなわち、双方の他方への浸透があらゆる個所で行われ、切り込み合い連続的であるばあいを想定すれば、両物体のどちらにも浸透が全然ないことになり、このばあい、物質の全量が間隙のなかにはいってしまうのだという理由

しかも また、融合の産物であるものが、それぞれの物体よりも大きな場所を占め、しかもちょうど両者それぞれが占める場所を合わせただけの大きさであるばあい(がしばしばあるという理由)。

ところが、もし全体が全体にゆきわたっているのであれば、一方がそこへ投入されたところの他方の物体の場所は、もとのままでなければならないだろう、と彼らは言う

また、場所が増大しないばあいには、空気が何ほどか出て行って、その代わりに他方の物体が入りこむのだと、彼らは説明する

また、小さいものが、より大きいものの内に入って、延び拡がって全体にゆきわたるということが、どうしてできるだろうか。また、その他多くのことをも彼らは言っている

しかし、他方の人々、つまり全体的融合を導入する人びとは、全体的融合が起きるばあいでも、物体が切り開かれるのではなく、寸断されて切れめに埋没するのでもない、と主張することができるであろう

たとえば汗にしても、身体を切り開くのではなく、にじみでるのであり、孔がありられているのでもない、と彼らは言うだろう

というのは、「汗が通り抜けられるように自然が仕組んでいるとしても、いっこうに構わないではないか」とだれかが言うかも知れないが、しかし技芸品のばあい、それらが薄くて透き間のないものである時に液体がそれらの全体に浸みこみ、反対側に流れ出るのが見られる

しかし、それらが物体であるならば、どうしてそういうことが起きえようか。切り開かないで通って行くということは、考えるのも容易ではない

他方また、互いにすべてを切るならば、むろん互いを破壊してしまうだろう

また、(二つの液体が混ぜられた時、量の増大が起きないばあいがしばしばあると彼らが言うならば、彼らは相手側に、その原因を空気の流出に帰することを許すはめになる

また、場所の増大するばあいを説明することは困難ではあるが、それでも次のように言うことを何が妨げうるか

すなわち、二つの物体のそれぞれが、その他の性質とともに大きさを持ちこむとすれば、必然的に増大が生じるのだと

なぜなら、大きさにしても、その他の諸性質がそうでないように、決して減び積ことはないし、また他の性質のばあいに、両性質の混合である別種の性質が生じるように、混合物が両者から合成された大きさを作りだすばあいには、別の大きさが生じるのだから

しかしここで、彼ら(ストア派)に対して、他方の側の人たち(ペリパトス派)はこう言うことができるだ

「もし(一方の)素材が(他方の)素材と、また物体が物体と並置されて、そして物理に大きさが宿っているというのであれば、まさにわれわれの所説を諸君は主張していることになるだろう

他方もし、素材同士もまた、それに第一次的に宿る大きさを伴って、全体にわたって融合するというのであれば、その仕方は、ある直接が別の直接とそれぞれの一隅で、それぞれの一点にまで接することによって結ばれる

――このばあいには、むろん長さの増大が起きるだろう――

というようなものではなくて、ある直接が別の直接の上にぴったり重ねられ、増大が生じないというようなものである

次に、より小さい物体がより大きいものの全体に、いやきわめて小さいものがきわめて大きいものの全体にゆきわたることは、明白に融合しているもののばあいにも見られることである

というのも、その点が不明なものに関しては、全体にゆきわたってはいないと主張することもできるが、明白に融合が起きているものについては、それが肯定されるだろう

だが、彼ら(ストア派)は物体が延び広がるということを言うであろうが、しかしきわめて小さい物体がそれほどに延び広がるという主張は、あまり説得的でない

2
しかしこの点は、すなわち水の塊であったものが空気となるばあい、何か起きるのか、または、その時まじるものにおけが「より大きい」ということは、どうしてか という問題は、それだけで検討されるべきだろう

というのも、彼らはそのような物体がその際変化して、もっと大きくなる――たとえば水が空気になるばあいのように――と言っているわけでもないのだから

また当面は、以上のものを述べるにとどめよう。まだこのほかにも、多くのことが双方によって主張されているのだが、もしろ、この問題について何を言うべきか、どのような設が上で述べられたことと調和するか、あるいは今述べられた諸説以外に何か別のものが見つかるかどうかを、われわれ自身が独自に考察してみようではないか

さてそこで羊毛(糸)を通って水が流れる(『饗宴』175dとか、パピルス紙がしゃくれが水を通らせるばあい、水であるこの物体全体が紙を通り抜けることをどうして否定できようか

あるいはまた、水が流れないばあいでも、素材は素材に、物理は物理に接触するのみで、融合するのは性質だけとわれわれが考えることがどうしてできるだろうか

なぜなら、水の素材は紙の外部で(紙の素材と)並列しているのではないだろうし、かといってまた、紙にあるいくつかの隙間に入っているわけでもないだろうから

なぜなら、その紙は全体が湿っており、素材はどの部分においても(湿っている)性質を欠いていないい

そして、素材があらゆる部分で性質を伴っているのであれば、紙のあらゆる部分に水がみるわけだ、さもなければ、水ではなくて、水の性質が(あるのだ)

しかし、それでは水の物理はどこにあるのか、(紙の)面が同じでないのはどうしてか

それは、付け加えられたもの(水)が紙を引き延ばしたのだ、紙は入って来たものから大きさを得たわけだ

全体融合が起きたのではなく、性質が付け足されたと主張する

しかし、得たのであれば、ある拡がが付け足されたわけだ。しかし、付け足されたのであれば、それは他方の内へ吸収されてしまったのではない。したがって、(紙と水の)素材は別々の場所にあるのでなければならない

しかし、物体の一方が他方に性質を与えたり、他方からもらったりするのと同様に、大きさについても同じことが起きるのを何が妨げようか

いや、ある性質が別の性質に合流するばあいには、前者はものとまるものもてなくて他の性質と一緒であり、そして他と一緒だという点で純粋ではないから、完全にもとのものではなくて、濁っている

他方、ある大きさが別の大きさに合流するばあいには、前者は消失しないのだ

だが、物体が物体を通るばあいに、必ず切り別(というの主張(ペリパトス派)は、どういう意味か、どれだけが注意するかも知れない、というのは、われわれ自身もあた、性質が物体を通ると主張するが、切り別ではは言わないからである

いや、それは、性質が非物体的なものであるからだ

しかし、素材自身も非物体的であるとすれば、どうして素材も性質も非物体的であるのに

これらの性質が素材と一緒になって、同じ仕方で、通っていかないだろうか

――性質が少数であるばあいに――

ただし、固い物質を通らないのは、固い物質がある種の諸性質をもっていて、そのために、妨げられるからだ

それとも多数の性質が一団となって、素材とともにそうする(他の物体を通る)ことが、不可能なのだろうか

とすると、もし一方、多数の性質の集まりが、いわゆる濃密な物体を作り出すのであり、多数の集まりということが、原因であるだろうし、

またもし他方、濃密さが――ちょうど物体性と呼ばれるものもそうであるように――それ自身一つの独特な性質であるとすれば、このような性質が(原因であるだろう)

したがって、諸々の性質は、性質である限りで混合(融合)するのではなくて、しかしかの性質を伴う限りにおいて、そうしないのだ、ということになるだろう

また素材は素材である限りで混合しないのではなくて、しかしかの性質を伴う限りにおいて、多数の集まりということが、どうしてそうなのであり

3
どころで、われわれは「ソーマトテース(物体性)」に言及したので、いったい物体性とは、すべて(の物体的要素)から成り立つものか、それとも物体性が一個の形相であり、ある一つの条理(ロゴス)であって、これが素材の内に入って物体を作り上げるのであるかどうかを考察しなければならない

素材がそれ自身の大きさをもたないとすれば、特にそうである。素材は大きさを手離さない限りで、大きさを保持するのだから

そこでも一方、物体とは、すべての諸性質から成るものに素材の加わったものであるならば、物体性とはまさにそれであるだろう

他方、もし物体性とは一つの条理であって、これがやって来て物体を作り上げるのであれば、当然この条理はすべての性質を一括して内蔵しているのだが

――それが別の意味でのロゴス(条理)、つまり物が何であるかを明らかにする定義という意味でのそれ(ロゴス)でなくて、物を作り上げるロゴス(条理)であるとすれば――

素材までも保有するのではない、否、それは素材における条理であり、素材の内に入って物体を仕上げるものでなければならない

だから、物体とは、素材とこれに内在する条理であるが、この条理そのものは形相であるので、素材後まで純粋に観照されねばならない

これがヌースの内にあるのは、これ自身も美知だからである。しかし、この点については別の個所で

たとえそれが不可分離的なものであろうとも、である。というのは、(素材から)分離されている条理は、別種のもの、つまりヌース(英知)の内にあるそれである。これがヌースの内にあるのは、これ自身も美知だからである。しかし、この点については別の個所で